

保育学の研究傾向

論文タイトルを用いた計量テキスト分析

Trends of Study in Early Childhood Care and Education

Quantitative Text Analysis Using Paper Titles

森下 順子

要 約

本研究の目的は、これまでの保育学の研究傾向を明らかにすることである。分析方法は、日本保育学会が刊行する『保育学研究』(第32巻～第52巻第3号)の論文タイトルを用いた計量テキスト分析である。結果、1) 共起ネットワークが示す8つのカテゴリーを「子どもの生活場面」「保育者による実践」「保育者の心理」「保育者の評価」「母親の育児」「歴史」という6つの研究群に分類できること、2) 年代別における研究群の論文本数の推移、主に2点を明確にした。以上のことから、今後求められる研究群が推察された。さらに、新たに行われる必要がある研究領域について示唆された。

1. 問題と目的

2015年4月、「子ども子育て支援新制度」がスタートした。この制度は、質の高い幼児期の学校教育・保育を総合的に提供すること、待機児童の解消、地域や家庭での子育て力の向上などを目指すものである¹⁾。子育てに関する問題や課題の解決の糸口として、保育現場への期待が高まっている。

子育て支援について、あらゆる施策が打ち出されてきた。1990年の「1.57ショック」を契機として、子育てがしやすい環境づくりと社会全体で子育てを担うための対策を取り入れた、1994年の「エンゼルプラン」が最初の施策である。その後、2000年に「新エンゼルプラン」、2001年には、仕事と子育ての両立支援等の方針として「待機児童0作戦」が閣議決定された。趣旨は、働きながら子育てをしたいと考える親が、仕事を辞めざるを得ない、出産を断念するといったことがないように、働き方の見直しや、保育施設を質・量とともに充実・強化するための施策である²⁾。このような流れのなか、幼稚園教育要領2008年³⁾、保育所保育指針2008年⁴⁾が改訂され、保護者支援、子育て家庭に関する支援、子育て支援のセンター的役割が明

確となった。

保育現場は、それらに対応するためにさまざまな実践を行ってきた。たとえば、早朝・延長保育、園庭解放やつどいの広場事業等の導入⁵⁾、保育者と保護者、地域等、すべてのコミュニティのつながりの中における発達と成長を見守る視点⁶⁾を持った保育・教育の実践である。つまり、保育者の仕事は、子どもの発達を促すために個の遊びや集団遊びなど、さまざまな体験をさせ、日常生活や社会生活が円滑にできるよう育てることにくわえて、地域や保護者に対する子育て支援の担い手として期待されている。以前よりも多くの実践が求められるようになったといえよう。

保育者は幅広い実践が求められているなか、保育者の心身の負担⁷⁾、バーンアウト⁸⁾などの問題が長年いわれている。仕事上で抱える困難とバーンアウトとの関係が議論されており、困難を生み出す要因として勤務環境、保育技能、職場の人間関係が挙げられている⁹⁾。多様な実践がますます要求される保育者にとって、保育者のストレスを軽減する何らかの取り組みが必要となると考えられる。

保育現場における実践の拡大、保育者への心的サポートの必要性がいわれているなかで、保育学領域ではどのような研究が行われてきたのだろうか。これまで多様な観点から研究が行われている。明治期・大正期などの歴史的背景¹⁰⁾¹¹⁾、諸外国の保育動向¹²⁾¹³⁾、幼児の遊び¹⁴⁾¹⁵⁾、発達障がいの子どもへのアプローチ¹⁶⁾¹⁷⁾、保護者支援¹⁸⁾¹⁹⁾、養成校の学生²⁰⁾²¹⁾や保育者²²⁾²³⁾への調査といった研究である。

研究の広がりにもとない、研究蓄積の整理が行われているのだろうか。課題となっている保育者による保護者支援、保育者の心理面に焦点をあてた研究はなされているのだろうか。保育学研究の現状と展望にかかわる研究は存在するが²⁴⁾体系的な整理は行われていない。「子ども・子育て支援新制度」の実施が開始される現在、学問的側面からも研究を深めていき、保育学研究の課題を探求していくことが、さらなる保育・幼児教育の充実につながっていくと思われる。つまり、既存研究の整理をとおして、今後求められる研究視点を可視化することが肝要であると考えた。

本研究は、これまでの保育学の研究傾向を明らかにすることを目的とする。研究傾向を明確にするために、日本保育学会が刊行する『保育学研究』の論文タイトルを用いる。論文タイトルは論文の内容を的確に、具体的に示すものであり、論文の内容を示す重要なワードが組み入れられている²⁵⁾。論文タイトルを活用して、学問研究の蓄積のあり方について示唆を得ている論文が複数ある²⁶⁾²⁷⁾ことから、本研究においても論文タイトルから研究傾向を探ることにした。

2. 方法

1) 分析対象

日本保育学会が刊行する『保育学研究』の論文タイトルを用いた。『保育学研究』を選定した理由は、会員数 4,000 人で、教育学、心理学、福祉学の分野の学会の中では会員数が多い学会である²⁸⁾ことから、保育学における研究の全体的傾向をとらえるのに適していると考えたからである。1994 年(第 32 卷)から 2014 年(第 52 卷第 3 号)までに掲載された研究論文(以下、「論文」)を対象とした。総論文数は 243 本である。研究目的が保育学の研究傾向を探ることから、特集論文を除いた論文を収集し分析した。論文数の推移は図 1 のとおりである。なお、本研究は、『保育学研究倫理ガイドブック』²⁹⁾の内容を遵守して実施する。

2) 分析方法

論文タイトルから研究傾向をつかむために、本研究では計量テキスト分析を行う。計量テキスト分析とは、計量的分析手法を用いてテキスト型データを整理または分析し、内容分析(content analysis)を行う方法である³⁰⁾。計量テキスト分析を採用した理由は、①テキスト型データを客観的に把握することが可能であること、②客観的事実を踏まえたうえで、分析者の理論仮説や問題意識に基づいたコーディングルール作成を重視していること³¹⁾、以上 2 点による。実際の分析には、フリーソフト「KH Coder」を活用した。

3) 分析の手順

分析手順は、①客観的にテキスト型データを把握する段階(1 段階目)、②コーディングルールを作成する段階(2 段階目)、2 ステップに分かれる。

1 段階目では、品詞の整理、頻出語および年代別における特徴語、共起ネットワークを確認する。品詞の整理の前段階として「保育」「者」のように分類が細かい語は、「保育者」と強制的に抽出されるように設定した。同様に、「保育士」「保育所」「保護者」を強制抽出した。また、「研究」「年」は研究内容を示す語とは異なるので分析対象から除外した。品詞の整理は、論文タイトルを「名詞」「サ変名詞」「形容動詞」「固有名詞」「組織名」「人名」「地名」「ナイ形容」「動詞」「副詞可能」「未知語」「感動詞」「動詞」「形容詞」「副詞」「名詞 B(ひらがなのみの語)」「動詞 B(ひらがなのみの語)」「形容詞 B(ひらがなのみの語)」「副詞 B(ひらがなのみの語)」「名詞 C(漢字1文字の語)」「否定助動詞」に分解した。つぎに、頻出語および年代別における特徴語を確認した。年代については、子育て支援施策や幼稚園教育要領、保育所保育指針の改正を考慮し、1994 年から 2000 年、2001 年から 2007 年、2008 年から 2014 年の 3 つに分けた。子育て支援を基準に時期を設定した理由は、①近年、保育学において子育て支援の課題がクローズアップされていること、②子育て支援の課題が保育と関連づけられて長年議論されてきたことによる。最後に、関連性の強い語を結んだ共起ネットワークを作成した。共起ネットワークから、『保育学研究』での研究カテゴリーを明確にした。

2 段階目では、1 段階目の結果を踏まえてコーディングルー

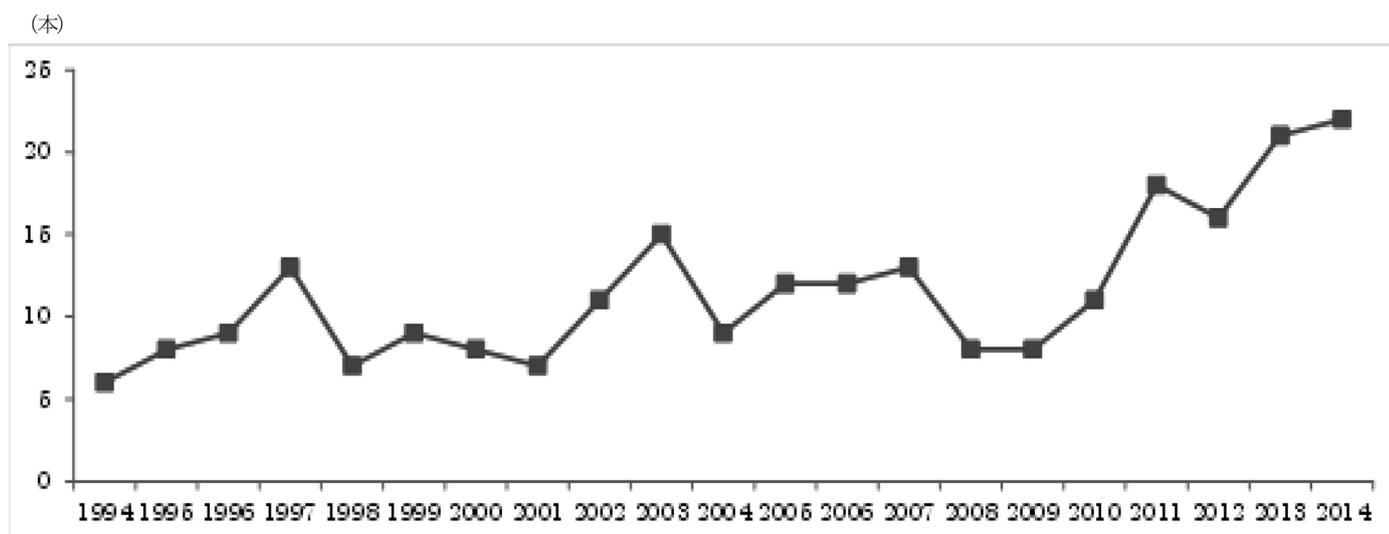


図1. 論文数の推移

表1. 上位150互の頻出後

抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数	抽出語	出現数
保育	90	意識	10	語る	6	模倣	5	内容	4
幼児	58	形成	10	行為	6	問題	5	乳幼児	4
保育者	56	中心	10	縦断	6	理論	5	能力	4
幼稚園	43	年	10	障害	6	あり方	4	発話	4
子ども	40	観察	9	場	6	スタイル	4	描画	4
関係	27	構成	9	相互	6	ニュージーランド	4	文化	4
着目	25	就学	9	乳児	6	プログラム	4	片付け	4
遊び	25	調査	9	比較	6	ライフ	4	養成	4
教育	24	発達	9	附属	6	育ち	4	アプローチ	3
分析	22	明治	9	幼	6	一元化	4	カリキュラム	3
保育士	21	意味	8	プロセス	5	園児	4	バランス	3
過程	20	子育て	8	意義	5	応答	4	ビデオ	3
実践	20	生活	8	園	5	改善	4	ワーク	3
身体	20	活動	7	援助	5	空間	4	愛	3
検討	19	環境	7	家庭	5	効力	4	運動	3
表現	17	関連	7	課題	5	思想	4	沖縄	3
考察	16	記録	7	機能	5	試み	4	家族	3
場面	16	共有	7	経験	5	質的	4	獲得	3
支援	15	効果	7	見る	5	実態	4	学生	3
影響	14	手がかり	7	構造	5	小学校	4	感情	3
母親	14	集団	7	指導	5	食事	4	感性	3
事例	13	仲間	7	施設	5	成立	4	基づく	3
変容	13	保	7	視点	5	専門	4	気	3
及ぼす	12	保護者	7	質	5	他者	4	協同	3
自己	12	役割	7	社会	5	対応	4	研修	3
評価	12	要因	7	生成	5	大正	4	語り	3
変化	12	クラス	6	展開	5	知	4	構想	3
保育所	12	音楽	6	特徴	5	注目	4	構築	3
育児	11	学校	6	日本	5	適応	4	師範	3
行動	11	教師	6	保育園	5	動き	4	視座	3

ルを作成する。共起ネットワークから明らかとなった研究カテゴリーを、より全体的な研究傾向をつかむためにいくつかの研究群にまとめた。最終的に、年代別における研究群の論文本数の推移を示した。

3. 結果

1) 頻出語および年代別における特徴語

分析対象となる論文の総抽出語は4,599語、異なり語1,000語となった。上位150の頻出語は表1である。論文タイトルに使われる頻出語をみると、「保育」「幼児」「保育者」「幼稚園」「子ども」「関係」「着目」「遊び」「教育」「分析」が上位10語を占めた。

年代別における特徴語を表2に示す。特徴語を調べる指標として、ジャッカード係数を用いた。ジャッカード係数は0から1までの値をとり、係数の値が高いほど関連が強い³²⁾。表2では、年代ごとに表されているジャッカード係数が高い語ほど、その年代との関連性が強い。「幼児」は1994年から2007年まで1位であるが、2008年以降はランク外となった。2008年から2014年において、「保育」が1位となっている。2008年以降、「保育」にくわえて「保育者」「保育士」といった保育という語を含む単語がランク入りしている。

表2 年代別における特徴語

1994年-2000年		2001年-2007年		2008年-2014年	
幼児	.165	幼児	.158	保育	.248
保育者	.147	幼稚園	.154	着目	.194
教育	.110	子ども	.126	保育者	.159
身体	.087	考察	.118	幼稚園	.142
自己	.076	教育	.099	関係	.122
及ぼす	.075	実践	.089	保育士	.120
表現	.070	遊び	.086	場面	.111
構成	.063	保育所	.071	検討	.108
明治	.062	表現	.067	過程	.107
変容	.058	観察	.060	遊び	.105

(値はジャッカード係数)

2) 共起ネットワーク

10回以上出現している語に注目し、共起の程度をジャッカード係数によって測定した。ジャッカード係数が0.1以上、つまり関連性が強い組み合わせの語を結んだ共起ネットワークが図2である。結果、9つのカテゴリーからなるサブグラフ(random walks)が検出された。解釈が難しいカテゴリーについては、KH Coderの関連語検索を行い、ジャッカード係数の高い語を検索し、カテゴリーを解釈した。

「幼児」「遊び」「事例」「検討」は、幼児の遊びの事例分析を示しているといえる。「子ども」「関係」「変容」「考察」は、子どもと他者あるいは物事との関係における変容を扱った研究といえる。「行動」「場面」「着目」「変化」は、4語では解釈が困難であった。そこで、4語に関してKH Coderの関連語検索を実行した。結果、「行動」は「園」(ジャッカード係数.250)、「生活」(ジャッカード係数.200)、「場面」は「集団」(ジャッカード係数.278)、「食事」(ジャッカード係数.250)、「着目」は「行為」(ジャッカード係数.148)、「共有」(ジャッカード係数.103)、「変化」は「縦断」(ジャッカード係数.200)、「話題」(ジャッカード係数.167)という語と強く関連していた。このカテゴリーは、子どもの日常生活の何らかの場面・話題を表しているといえる。

「身体」「表現」「保育」「実践」は、保育者による身体表現にかかわる保育実践を示しているといえる。「保育士」「意識」は、保育士による自身あるいは他者に対する意識を扱った研究といえる。「評価」「自己」「形成」は、3語だけでは解釈が難しいカテゴリーであった。また、KH Coderの関連語検索を実行したが、「意義」「過程」「質」といった解釈につながるものが困難な語と強く関連していた。そこで、出現数が多い「評価」「自己」という2語を用いて解釈を行った。KH Coderの抽出後検索を用いて、自己評価の対象を探索したところ保育者の自己評価であった。したがって、保育者の自己評価を表しているカテゴリーと判断した。

「母親」「育児」は、母親の育児を示しているといえる。「中心」「幼稚園」「過程」「分析」は、4語では解釈が困難であった。4語に関してKH Coderの関連語検索を実行した。結果、「中心」は「大正」(ジャッカード係数.273)、「設立」(ジャッカード係数.200)、「幼稚園」は「附属」(ジャッカード係数.146)、「明治」(ジャッカード係数.111)、「過程」は「生成」(ジャッカード係数.136)、「共有」(ジャッカード係数.125)、「分析」は「質的」(ジャッカード係数.130)、「語る」(ジャッカード係数.120)という語と強く関連していた。このカテゴリーは、幼稚園の歴史を扱った研究といえる。

最後に、「保育者」「影響」「及ぼす」は、解釈が困難であった。KH Coderの関連語検索、出現数の多い語への注目などをしてみたが、解釈ができなかった^{注1)}。

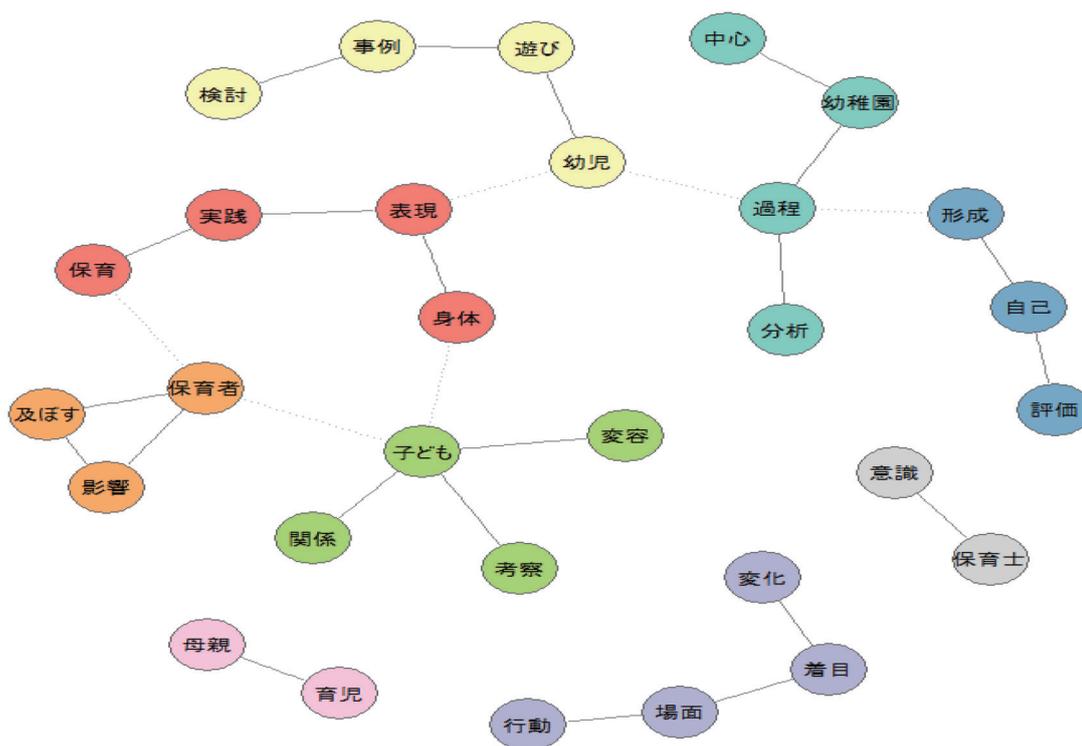


図2 共起ネットワーク

3) コーディングルール作成とコーディング結果

共起ネットワークから9つのカテゴリーに分類でき、8つのカテゴリーについて解釈が行われた。ここでは、明らかにされた8つのカテゴリーを問題意識に基づいた分析が行えるようにコーディングルールを作成する。

本研究目的は、これまでの保育学の研究傾向を明確にすることであった。研究傾向の可視化においては、できるだけ多くの論文を分類できるコーディングルールが必要と考えられる。この研究では、8つのカテゴリーを、カテゴリー同士の統合、カテゴリー内の内容の拡大を通じて6つの研究群にした。

具体的には、幼児の遊びの事例分析、子どもと他者あるいは物事との関係における変容、子どもの日常生活の何らかの場面・話題に関するカテゴリーを「子どもの生活場面の研究」(以下、「子どもの生活場面」)、保育者による身体表現にかかわる保育実践にまつわるカテゴリーを「保育者による実践の研究」(以下、「保育者による実践」)、保育士による自身あるいは他者に対する意識にかかわるカテゴリーを「保育者の心理の研究」(以下、「保育者の心理」)、保育者の自己評価におけるカテゴリーを「保育者の評価の研究」(以下、「保育者の評価」)、母親の育児に関するカテゴリーを「母親の育児の研究」

(以下、「母親の育児」)、幼稚園の歴史にまつわるカテゴリーを「歴史の研究」(以下、「歴史」)の6つである。

6つの研究群についてコーディングルール^{注2)}を作成した。コーディングルール作成にあたり、個々の論文タイトルにもどり、6つの研究群に該当する語を抽出した。語の抽出において、執筆者各自が論文タイトルから研究群にあてはまる語を抽出した。執筆者間で一致度を確認すると80%を超えた。本研究では、執筆者間で一致しなかった語は研究群への分類を行わなかった。

コーディングルールとコーディング結果は表3である。なお、1つの論文が2つ以上の研究群にコーディングされることがある。65.8%の論文が6つの研究群に分類された。「子どもの生活場面」が25.5%と最も多く、「歴史」が15.2%、「保育者による実践」が14.8%と続く。「保育者の評価」「母親の育児」の割合が少ない。

年代別における研究群の論文本数の推移を図3に示す。1994年から2000年までは「歴史」が最も研究が行われていたが、その後減少し、2001年以降、「子どもの生活場面」が一番となっている。「保育者の心理」は数少ない研究群であったが、2008年から2014年の間に増加している。「保育者の評価」「母親の育児」はいずれの時期も研究は数少ない。

表3 コーディングルールとコーディング結果

コード名	コーディングルール	論文数	割合
子どもの生活場面	ふざける or オムツ or ボール or 食事 or 片付け or あいさつ or 給食 or 遊び or 砂遊び or 遊ぶ or あそぶ or やりとり or 会話 or 描画 or うたう or 泣く or 泣き or 生き物 or 栽培 or 積み木 or 遊戯 or 会合 or 造形 or (幼児 and 学習)or(対人 and 葛藤)or(幼児 and 身体)or(音楽 and 表現)or(幼稚園 and 場面)	62	25.5%
保育者による実践	読む or 読む or 読み書き or つなげる or (保育者 and 対応)or(保育者 and 身体 and 表現)or(指導 and 対応)or(指導 and 方法) or(教師 and 支援) or (保育 and 支援)or(保育者 and 支援)or(保育者 and 援助)or(保護者 and 支援)or(保育者 and 相談)or(保育者 and 役割)or(保育 and 実践)or(無理 and 保育)or(コンピテンス and 保育)or(保育者 and ことば)or(移行+支援)or(保育+行為)	36	14.8%
保育者の心理	精神 or ストレッサー or メンタル or 困る or リアリティ or 揺らぎ or バーン or 疲労 or (保育者 and 葛藤)or(保育者 and 効力)or(教師 and 意識)or(保育士 and 負担)or(保育士 and 価値)or(保育士 and 意識)	20	8.2%
保育者の評価	省察 or near(保育-評価)or(自己+評価)or(保育者 and 評価)or(教育 and 評価)	11	4.5%
母親の育児	育児 or 悩み or 養育	11	4.5%
歴史	歴史 or 大正 or 師範 or 尋常 or 系譜 or 明治 or 思想 or 昭和 or 戦前 or 善隣 or セツルメント or ロシア or 事業 or 世紀 or コルチャック or 史的 or 野村 or 思想 or 倉橋 or 鈴木 or 東 or スキーマ or 世紀 or 和田	37	15.2%

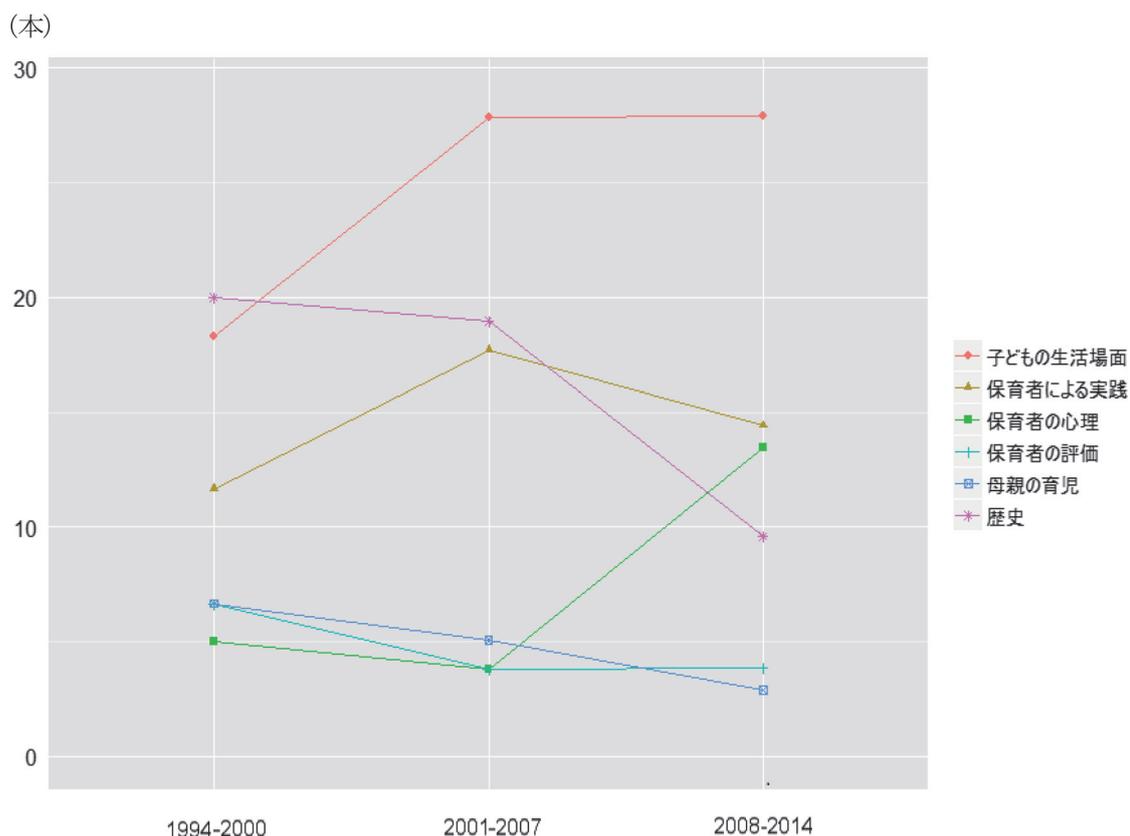


図3 年代別における研究群の論文本数の推移

4. 考察

本研究により、『保育学研究』の論文タイトル(1994年から2014年)を6つの研究群に分けた。以下、年代別の研究群の傾向、特筆すべき研究群、今後求められる研究領域の3つの観点から考察する。

まず、年代別の研究群の傾向に関して考察する。

第1に1994年から2000年についてである。1990年「1.57ショック」を契機として、「エンゼルプラン」(1994年)が打ち出された年代である。「子どもの生活場面」と「歴史」に関する研究が多い。「子どもの生活場面」については、子どもを主体とした保育や自由保育について議論がなされていた時代背景がうかがえる。また、「歴史」については、主に国内外の保育思想であり、幼児教育・保育の方向性を模索するための役割を担う研究が求められていたと推察される。「母親の育児」に関する論文数が少ないことから、政府の子育て支援施策と保育学研究との関連性が弱く、国の施策が保育現場への期待とまでいかなかったことがうかがえる。

第2に2001年から2007年についてである。「待機児童0作戦」が新たに閣議決定され、子育てに関する問題や課題の

解決の糸口として、保育現場への期待が高まった時期である。この時期の論文テーマとして注目したいのは、「保育者による実践」の論文数が増加していることである。「待機児童0作戦」は質と量が強調され、保育サービスの充実と同時に、保育の質の確保が重要課題であったことによると考えられる。

第3に2008年から2014年についてである。2008年に幼稚園教育要領、保育所保育指針が改訂され、保育現場の子育て支援のセンター的役割が明確化され、保育の質と量が求められるようになった。そのため、「子どもの生活場面」「保育者による実践」「保育者の心理」に関するテーマの研究が多くなされたと考えられる。

つぎに、特筆的な研究群に関して考察する。

第1に「保育者の心理」についてである。以前から、保育者のストレス、バーンアウトなどが保育現場の課題とされてきた³³⁾。しかしながら、本研究より「保育者の心理」に関する研究は、全体の8.2%にとどまっている(表3)。論文数は増加している(図3)が、問題の深刻さを踏まえると不足しているといえよう。また、福祉領域では、職員の満足度を高める視点の重要性が指摘されている³⁴⁾現在、保育現場にも保育者の満足

度、離職率の低下に影響をおよぼす要因の探索が求められると推察される。

第2に「保育者の評価」についてである。あらゆる領域において、実践者が評価を受け、最終的に利用者の生活課題が解決されることが必要だといわれている³⁵⁾。根拠(エビデンス)に基づいた実践の必要性である。子どもや保護者へのアプローチが多様化しているなか、今後、保育者が自信をもって取り組むことができる実践の評価指標の開発が不可欠といえよう。

第3に、18年間の論文件数に伸びのない「母親の育児」についてである。日本教育新聞(平成27年3月16日発行)NEWS インサイドによる園へのアンケート調査によると、「保護者対応で困難を感じていることはあるか」について54.0%の園が「ある」という回答であった。現在、ひとり親家庭を含む貧困家庭の問題、若年層の未熟な子育てによる虐待問題、孤立した子育てやプレッシャーによる育児不安など、子育ての困難さはさまざまである。これらの複雑な事情に対応できる保護者支援の専門性が今後ますます保育者には求められるであろう。

最後に、今後求められる研究領域に関して考察する。「保育者養成」にまつわる研究の必要性である。論文タイトルの「養成」に関する出現回数は4回にとどまっている(表1)のが現状である。保育学において、「保育者養成」にかかわる研究が注目されることが、保護者支援などに対応できる人材を現場に送り出すことにつながると考えられる。

5. 本研究の限界と課題

課題として第1に、保育学会以外の研究雑誌を分析対象としていないことである。保育や幼児教育に関する学会誌をさらに幅広く調査・分析することにより、今後の研究課題がより明確になると思われる。第2に、本研究は論文タイトルのみに着目して分析したことである。論文のキーワード、内容面に焦点をあてて丁寧に分析することが課題である。

注

(注1)自動的に語を抽出しているため、分析結果として意味のない語や、分析者の問題意識とは関係のない語も含まれてしまうことが指摘されている³⁶⁾。

(注2)コーディングルールの記述方法はつぎのとおりである。いずれの語も論文タイトルに出現する場合は「and」、いず

れかの語が論文タイトルに出現する場合は「or」、連続して出現する語は「+」、複数の語がともに出現している場合、それらの語が前後10語以内に出現している場合、「near(-)」とする。

引用文献

- (1)内閣府 子ども子育て支援新制度。
<http://www8.cao.go.jp/shoushi/shinseido/index.html>. 情報取得2015.3.24
- (2)厚生労働省雇用均等・児童家庭局保育課長(2001.9.6)待機児童0作戦の推進について. 雇児保発第35号. 186
- (3)文部科学省(2008) 幼稚園教育要領
- (4)厚生労働省(2008) 保育所保育指針
- (5)渡辺顕一郎・橋本真紀(2011) 地域子育て支援拠点ガイドラインの手引. 中央法規. 2-21
- (6)広岡義之(2013) 新しい保育・幼児教育方法. ミネルヴァ書房. 178-197
- (7)加藤由美 安藤美華代(2012) 新任保育者の抱える困難に関する研究の動向と展望. 岡山大学大学院教育学研究科研究集録. 151. 23-32
- (8) 齋藤恵美 田中紀衣 村松公美子 橘玲子 宮岡等(2009) 保育従事者のバーンアウトとストレス・コーピングについて. 新潟青陵大学大学院臨床心理学研究. 3. 23-29
- (9)前掲(7)
- (10)喜舎場勤子(2006) 沖縄県における善隣幼稚園に関する考察—設立時期を中心に—. 保育学研究. 44(2). 8-17
- (11)小山みずえ(2008) 大正・昭和初期の幼稚園における「お話」の成立過程—大阪市立幼稚園にける実践・研究を中心に—. 保育学研究. 46(2). 121-131
- (12)飯野裕樹(2010) ニュージーランドにおける就学前教育の週20時間無償政策に関する研究—1999年から2008年における労働党 Clark 政権に注目して—. 保育学研究. 48(2). 6-16
- (13)大野歩・七木田敦(2011) スウェーデンの就学前クラスに関する研究—「学校化」問題と生涯学習アプローチの観点から—. 保育学研究. 49(2). 19-29
- (14)藤田清澄(2011) 遊びの中で見られる幼児の身体接触の意味—身体知の視点から—. 保育学研究. 49(1). 29-39
- (15)宮田まりこ(2013) 3歳児の積木遊びについて—行為と構造の変化に着目して—. 保育学研究. 51(1). 50-60

- (16)松井剛太 (2007) 障害のある幼児の就学支援システムの構築—サポートファイルの活用による小学校への接続の試み—. 保育学研究. 45(2). 103-110
- (17)ポーター倫子 (2011) 高機能自閉症児のこだわりを行かす保育実践—プロジェクト・アプローチをてがかりに—. 保育学研究. 49(1). 73-84
- (18)朴信永 (2006) 子育てにおける認知改善が養育態度・育児ストレスに及ぼす効果. 保育学研究. 44(2). 126-138
- (19)今井麻美 (2014) 子どもの幼稚園入園に伴い母親が保育者と関わることの意味. 保育学研究. 44(2). 124-134
- (20)谷川夏実 (2010) 幼稚園実習におけるリアリティ・ショックと保育に関する認識の変容. 保育学研究. 48(2). 96-106
- (21)佐藤和順 (2012) 教師・保育者を志すワーク・ライフ・バランス意識. 保育学研究. 50(1). 41-52
- (22)草信和世・諏訪きぬ (2009) 現代における保育者の専門性に関する一考察—子どもと響き合う保育者の身体知を求めて—. 保育学研究. 47(2). 82-91
- (23)谷川夏実 (2013) 新任保育者の危機と専門的成長—省察のプロセスに着目して—. 保育学研究. 51(1). 105-116
- (24) 無藤隆 (2003) 保育学研究の現状と展望(連載企画:専門分野の最前線と研究動向). 教育學研究. 70(3). 393-400
- (25)秋元典子 (2013) 採択される看護研究論文 第 5 回 論文タイトルとキーワード. 看護展望. 38(6). 64-66
- (26)趙敏廷・谷口敏代・原野かおり・松田実樹・谷川和昭 (2013) 『介護福祉学』誌にみる介護福祉学の研究傾向—論文タイトルを用いたテキストマイニングから—. 介護福祉学. 20(2). 152-158
- (27) 小田切康彦 (2014) 政策系大学における研究動向：論文タイトルを用いたテキストマイニングから. 徳島大学社会科学研究. 28. 61-82
- (28) 一般社団法人日本保育学会 日本保育学会とは http://jsrec.or.jp/?page_id=118 (情報取得 2015/5/19)
- (29)一般社団法人 日本保育学会 倫理綱領ガイドブック編集委員会/編 (2012) 改訂 保育学研究倫理ガイドブック 子どもの幸せを願うすべての保育者と研究者のために. フレーベル館. 96
- (30)樋口 耕一 (2014) 社会調査のための計量テキスト分析—内容分析の継承と発展を目指して 単行本—. ナカニシヤ出版. 250
- (31) 前掲(30)
- (32) B.S.エヴェリット著・清水良一訳 (2010) 統計科学辞典 (普及版). 朝倉書店. 528
- (33)前掲(7), (8)
- (34)李政元(2011)ケアワーカーの QWL とその多様性—ギルド理論による実証的研究. 関西学院大学出版会. 197
- (35)大島巖(2012)制度・施策評価(プログラム評価)の課題と展望. 社会福祉学. 53(3). 92-95
- (36)前掲(30)

謝辞

本研究のデータ分析にあたって、奈良教育大学の厨子健一先生にご協力いただきました。ここに記して感謝の意を表します。

